

1. 「都市型社会に対応した市街地環境のあり方及び評価方法に関する研究」の評価結果（事後評価）

【総合評価】

集団規定のうちの形態規制の性能規定化に向けて取り組んだものであり、所内外の環境工学の有識者と広いテーマについて意欲的に取り組んだ点が評価でき、研究の実施方法、体制等は、概ね適切であったと評価する。また、諸条件の客観性に課題は残るものの、定量的な評価方法について一定の成果をあげており、概ね目標を達成できたと評価する。

なお、要素間相互の関係性についての考察が十分でないことから、建築基準法等の基本的検討及び法制度の見直し等に反映する上で、総合的に評価が行えるよう、各指標の要素を精査し、研究の進展を図らるたい。

【評価指標別評価結果】

研究の実施方法、 体制等の妥当性	1 適切であった 2 概ね適切であった 3 やや適切でなかった 4 適切でなかった	★★ ★★★★★ ★
目標の達成度	1 目標を十分達成できた 2 概ね目標を達成できた 3 あまり目標を達成できなかった 4 目標を達成できなかった	★★★★★ ★★★★★

【指摘事項】

なお、以下の指摘事項があったので参考にされたい。

- ・性能規定化にあたっては、考えられる環境性能全てについて個別の指標を使うことが現実的でない点に留意し、今後複数の環境性能を示す共通の指標の検討を進められたい。
- ・視覚的環境の計測手法は、各国の研究者による成果も比較して研究を進められたい。
- ・条件設定の数値について、今後他条件下の状況を検討するなど、客観化を進められたい。
- ・採光環境と視覚的環境では達成可能性が異なる。
- ・圧迫感については、可視空間量という概念提示があったが、圧迫感をうまく表す指標導出について、今後より多面的考察を期待したい。
- ・視覚的な圧迫感の研究は、景観訴訟への対応に寄与するようであるが、SD法は十分機能するか検討していただきたい。
- ・被験者の先入観を排除できる手法を検討していただきたい。
- ・今後、採光環境、風環境とヒートアイランドとの関係を考慮し研究を進められたい。

平成19年10月24日

国土技術政策総合研究所研究評価委員会分科会

第二部会主査代理 熊谷 良雄

2. 「地震安全性能技術を活用した地震防災の検討」の評価結果（事後評価）

【総合評価】

「地震」を主な対象として、被災リスクの定量的予測・情報化技術や、市場選択・建築生産マネジメント支援技術の開発について研究が進められた。一般ユーザーの視点において、やや不十分な点があったが、被災リスク等に関する関係者と積極的に取り組んだ点は評価でき、研究実施方法、体制等は概ね適切であったものと評価する。また、定量的評価結果を一般ユーザーの分かりやすい「安心」へ変換する点で課題は残るものの、優れた成果が得られており、目標は概ね達成できたと評価する。

また、一般の方々にも分かりやすいものになるよう検討する等、今後の研究の発展を期待する。

【評価指標別評価結果】

研究の実施方法、 体制等の妥当性	1 適切であった 2 概ね適切であった 3 やや適切でなかった 4 適切でなかった	★★★★★ ★★ ★
目標の達成度	1 目標を十分達成できた 2 概ね目標を達成できた 3 あまり目標を達成できなかった 4 目標を達成できなかった	★★★★★ ★★ ★

【指摘事項】

なお、以下の指摘事項があったので参考にされたい。

- ・表面的整理に偏っており、「安心」を解明したとは言えない。
- ・一般ユーザー視点が、もう少しあると良いのではないか。
- ・ハード面の視点に基づいている「安心の」環境心理的側面が欠けているのではないか。
- ・工学分析のみではなく「安心」への変換について検討されたい。
- ・「地震被害リスク」の範囲及び成果の具体性の提示をされたい。
- ・自然災害の発生はどのように評価に入れるべきか検討されたい。
- ・今後も工学的な技術面での精度を高めるための研究を進めていただきたい。
- ・安全性の定量化において、精度の高いモデルほどパラメータ数が多くなり複雑化するため、ロバスト性の確保に留意して研究を進めていただきたい。
- ・労作である。しかし、リスク評価の情報の受け手であるユーザーがもっと参画すべきであった。
- ・建築物の終局状態の想定及び想定外力等による評価の振れ幅が表示されるべきではないか。

- ・被災リスクの考え方に空間的安全性（まちとしての）評価も入れるべきではないか。
- ・心理構造分析に基づく定量化を今後検討されたい。

平成19年10月24日

国土技術政策総合研究所研究評価委員会分科会

第二部会主査代理 熊谷 良雄